
スレチガイ

三森咲月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スレチガイ

【Nコード】

N0363E

【作者名】

三森咲月

【あらすじ】

数年ぶりに再会した志保と新一。嬉しい志保とは違い、新一はどこか元気がない。胸が痛みながらも勇気を振り絞って志保がした質問に新一が答えたのは・・・！？

1 プロローグ（前書き）

基本的に新蘭です。

1. プロローグ

雨がしとしと降る中、私たちは再会を果たした。

10年ぶりの再会。私は胸が弾んだ。

だが彼の様子はどこかおかしい。

体調でも悪いのか、とても青い顔をしていた。

「どうしたの？」

何回問いかけても返事はない。

私は疑問に思い、ある人の名前を口にした。

その直後、私の予想通り彼の肩がびくんと跳ね上がる。

——・・・やっぱり

彼が自分のこと以外でこんなに顔色が悪くなるのは彼女のほかにない。

彼女に何かあったに違いない。

私はそう思って、思い切って聞いてみることにした。

ズキン

胸が痛む。私はまだ彼が好きだ。

あきらめようと心がけても、その気持ちが変わることはなかった。
いい加減他の人を好きになりたいけれど、ダメだった。

「・・・工藤君」

自分の気持ちを振り切って声を絞り出す。
声にならなかった気持ちは心に、さらに奥へ押し込まれた。

「蘭さん、どうかしたの？」

もう一度、彼の肩がびくと跳ねる。
そして俯いてしまった。

さて、どうしたものかと私は心で深いため息をつく。
他の状況なら彼をからかっていそうなものだが、今は彼をからかって面白くもなるともない。余計落ち込ませてしまっただけだ。

「・・・んは・・・」

ぼつり、と彼は声を漏らしだす。

「蘭が・・・付き合いだした」

愕然となるのにそう時間はかからなかった。

彼女が、あんなに一途だった彼女が彼以外の男と？

ありえなかった。理屈から言っても。私の考え方でも。

こんなに呆然となったのは、久しぶりだった。

1 プロローグ（後書き）

こんにちわ（ ）

初めて投稿する三森皐月です。

未熟ですが、宜しくお願いします。

2・Why

私が組織から抜け出してから向かったのは彼の家だった。

状況が状況のため、説明するしか方法はないのだと思ったからだ。

しかし、目が覚めてから辺りを見回すと変わった造りをした家の中だった。

その家に住んでいたのは老人一人。

どうやら生きていくためには彼にかくまってもらうしか方法はない
と思い、私は一生懸命状況を説明した。幸い彼は私が探している『
彼』の友人だったので私の説明が不十分でも大体理解してもらえた
ようだった。

最初彼は私のことを憎んでいたはず。

当たり前だ。彼がこの薬を飲まなければこんな身体になることはな
かった。

組織の存在にも気づかないまま平和に日常を送ってこれたはずなの
だ。

高校生活をふつうに送って、恋愛もして、友情も大事にして・・・。
すべて私のせい。私があの手をつくったせい。

彼が平和に暮らせなかったのは全部、私のせい。

しかし、次第に彼は私に優しくしてくれていた。

私が原因にもかかわらず、皆と平等に扱ってくれた。

普通の生活を夢見ていた私には幸せすぎるほどの生活だった。

事件が発生しているときも彼と、そして仲間たちと行動し解決して
いく。

私も少しずつ知恵を出して事件に役立てるよう少しは努力した。

こんな私が平和に生活していけた。

それだけでも十分だった。

だからあの出来事に気づいたときは愕然とした。

彼に、恋愛感情を持っていたこと。

私は一生組織で生活していくものだと思っていたから、当然恋愛なんて、ましては自分が誰かに恋心を抱くなんて考えもなかった。全てが新しい感覚。胸の高鳴り、嫉妬、頬の火照り。

自分が別人になったような気がして、夢を見ているような気がして、たまにぺちぺちと頬を叩いたこともあった。

私はいつも彼に助けられていた。
ずっと、ずっと。

「今度は、私が助ける番ね」

私はぽつりと呟いた。

2・Why(後書き)

なんか上手く書けません。

読みにくかったらすみません(^^ゞ

3・cry

「・・・何があったか、詳しく説明して頂戴」

落ち込んでいる彼を横目に、淡々とした表情で私はこの質問を口にした。

彼の悲しみがどれだけ深いか、見れば分かる。

しかも、私は結構長い間彼のそばにいたのだ。

彼がどんな性格か、大体理解はしていると思う。

彼女のことになる、彼は繊細な心の持ち主と成り下がってしまうのだ。

男として少し最悪なことだけけど。

彼女がどんなに彼にとって大事なのか、よく分かるからいいようなものの。

「俺が蘭の家に行こうとしたら・・・」

・・・つまり、大体の経緯はこうだ。

彼は彼女の家に行こうとした。しかし彼は彼女が他の男と歩いているところを偶然見てしまった、と。そして彼はショックを受けた。

——なるほど？

しかし彼の説明は長かった。たったこれだけの説明に一時間もかか

ったのだ。

通常の彼から考えるとちょっとおかしい。

「・・・っていうか狂っているのかしら」

「は？」

私たちは一旦近くの喫茶店によることにした。

そのほうが話しやすいし、落ち着くだろう。

私としてもここは少し恥ずかしい。

なんせ、ここは都会の中心 新宿のど真ん中だったのだから。

ここで男とあれど、彼が泣くのはいくらなんでも見苦しいだろう。

喫茶店ならもつとしゃんとしてくれるかもしれない。

私はそんな淡い期待を抱きながら喫茶店の中へ入って行った。

・・・しかし、喫茶店に入った十秒後、彼は泣いた。

客は少なかった。だからよかったものの。

私の期待は静かに敗れ去ったのであった。

3・cry(後書き)

ぶ、文章が・・・。

めっちゃ下手くそ・・・。

アドバイスがあったら、お願いしますッ!!

文章をうまく書くにはどうしたらいいんでしょうかね??・・・う
ん。

4・別人（前書き）

予定変更しました。

新蘭か、コ哀になるかまだ分かりません。

すみません。

4・別人

私は、初めて男が泣く瞬間を目にした。

「く、工藤君・・・？」

それだけ切羽詰っていた、と言うことだろう。
だが男が泣くのとて。

——情けないと思わないのかしら？

心底からため息をつきなくなる気分になってくる。
今日はなんて最悪な日だろう。

彼に会えて嬉しいはずなのに、彼は泣くわ、周りは注目するわ。
大騒ぎだ。

p r r r r p r r r r p r r r r

喫茶店のフロアに、携帯の着信音が鳴り響いた。
それが自分のだと気づくまでに数秒かかった。
気づいたのは彼が指摘してくれたおかげだった。

急いで店のトイレに急ぐ。
はたとドアを閉めてボタンを押した。
着信表示は非通知だった。
緊張した面持ちで通話をする。

「もしもし？」

『あ。志保？』

男の声。私は自分が一瞬変になったのかと思った。

その男は何回も自分の名前を呼んだ。

さっきまで会っていた人物と同じはずなのに、なぜか霧が晴れたように心を振るわせる。

まるで別人のようだった。さっきの人も、彼《工藤君》のはずなのに。

『あ、あのさー』

非常に言いにくそうに彼は切り出した。

私はその続きを息を潜めて待つ。

『・・・黒羽ってヤツ、知らない？』

「は？」

何を話し出すのだ、この男は。

頭にハテナマークを浮かべながら私は言った。

「・・・知らないけど」

『そっかぁ・・・』

残念そうに彼は言った。

少し切羽詰った声に息を呑んだ。

私達はその後二、三言喋って通話を切った。

最後に、彼は『アイツから連絡あったらメールして』といって一方的に切ったのだ。

少しむっとしながらも気持ちを抑えた。

やれやれ、と思いながらトイレから出て彼の待つ席へと向かう。
・・・が、彼はいない。

「んねえ、俺とちよつと遊ばない？」

突然耳にかかった声に、私は驚き、そして気絶した。

4・別人（後書き）

読んで頂き、ありがとうございます。

アドバイス等がありましたら、感想の所にお書きください。

これから段々と忙しくなるので投稿する日にちは不定期になると思
います。

ご了承下さい。

5 ・彼と、彼女（前書き）

突然の予定変更、すみませんでした。

5・彼と、彼女

今から丁度二時間前、確かに俺とアイツは会っていた。調べ、調べ、調べまくった彼の素性にそりゃ最初は驚いたが、今はそんなに気にしてはいない。

っていうか気にできない。

しかし、青空の中、男二人が公園の噴水の前で向き合っていたのは、なんとも奇妙な図だったと思う。現にちらちらと人に見られていたし。

・・・それはさておき、俺たちが対面したまでのことは良かったのだが。ここから先が問題だった。

なんと、彼が俺の代わりに彼女に会いに行くと言ったのだ。

俺は当然反対した。だって、彼はもともと関係なかったのだし、久しぶりに会いに行こうとしているのは俺だ。いくら変装の名人だとは言え、それはひどいだろう。

しかも彼、自分が大泥棒【怪盗キッド】だから会いに行かなくちゃいけないとかなんとか言い出すし。

いやそれオメー、全然関係ねえだろとか突っ込みながら、呆れて放心したこともあった。

「だってさ、新一全然会ってあげてないじゃん。志保ちゃんフランス

から帰って二ヶ月も経ったのに」

彼女の気持ちも考えてあげなよー、と彼は頬を膨らませた。

確かに、その気持ちは分かる。

彼女からフランス留学する前に告白は受けたし、彼女は返事を聞かぬまま

（つまり言わせてもらえないまま）旅立って行ってしまった。
従って、次に会ったときは（必然的に）返事をしなければならないことになる。

——コイツ、分かってんのか？

気まずいってこと。

・・・オメーの辞書には載ってねえのかよ。

呆れてモノが言えない、とはこういうことを言うのか。
改めて思い出した言葉に、俺は妙に納得してしまった。

・・・さて、目の前にいるのは俺の知っている女【彼女】。
俺は彼女ときこちなく合わせながら、すぐに帰りたいという
衝動に駆られていた。

——コイツ・・・!!

ちっ、と心の中で舌打ちをするも、どうにもならない。
俺は横でヘラヘラ笑っている男に横目で見て、テンションが
段々下がっていくのを感じながら途方にくれていたのだった。

5 ・彼と、彼女（後書き）

さて、この話では‘彼’の過去、と言うことで載せさせて頂きました。

さあ誰の過去か、お分かりになったでしょうか？

前話を読んで下さった方は、大体の方がお分かりになったと思います。

これからどんな展開になっていくのか、こつこつ期待下さい。

6・再会（前書き）

まだ新志になるか、新蘭になるか分かりません。

6・再会

ずっと見つめていたい程綺麗な夕焼けが、
段々と熱を冷ましながら沈んで行こうとしている。
夕焼けが見れる時間が限られている分、その輝きは
おおらかで、勇ましくて、そして儚げだ。

そして俺の目の前にいる彼女も儚げで、
今にも泣き出しそうで、壊れかけていた。

一輪の花のように、女性は心が繊細だ。

一人でいさせるのはあまりにも可哀想で。
守ってあげたくて。

ずっとそばにいてあげたくて。

でもそれは恋や愛ではなく、もっと別の何か。

「ごめん。俺はオメーのこと、恋愛対象として見れねえんだ」

・・・家族としてしか、接せることができねえ。

深呼吸して、やっと導き出した言葉。
後悔はないはず。

俺には彼女以上に大切な人がいる。
その人を、傷つけたくない。

壊したくない。

守りたい。泣かせたくない。

「・・・そう、分かった」

彼女にあんまり落ち込んだ様子はなかった。

もう、分かっていたのか。

俺の心は複雑になる。

彼女を振ってよかったのか。

後悔はしていないはずなのに、何か苦いものが
体中に駆け巡る。

薬を飲んだはずなのに、身体に回ったのは毒のように。

寂しさと、安堵が混じったため息を吐いた。

肺の端っここら端っこまでぎゅうぎゅうに押し込まれていた
二酸化炭素はそこで一気に吐き出された。
肺の中は空っぽ。

そして、俺の心の中も空っぽ。

あるのは、大切な彼女の^{アイツ}、花の名称。

“蘭”

と言う1文字。

6・再会（後書き）

随分遅くなりました。
すいません。

前にも書きましたが、ここのところ忙しいのでものすごく不定期になります。

ご了承下さい。

7・幼馴染（前書き）

初の蘭視点から見た物語です！

7・幼馴染

私はある場所の道をゆっくり歩いていた。

公園にある、緑の葉をいつぱいつけた木がさわさわと揺れる。

私はこの道を、小さい頃から何度歩いただろうか。

かつて幼馴染と呼んでいた彼と迎えた四季を

私は今でも鮮明に覚えている。

彼が今、何をしているのか。

元気にやっているのか。

生きているのかさえも私は知らない。

何にも、まったく知らない。

「蘭!!」

ぼーっとして考えている背中にバシッと
軽い衝撃を感じた。

目を少し細めながら横目で後ろを見る。

「・・・園子」

そこには心配そうな表情をした親友がいた。

手にはガリガリくんと言うアイスを持っている。

片方を私に渡す。

ソーダ味。彼女はコーラ味。

私は微笑みながら彼女を見て、小さくありがとうと言った。そしてアイスの袋をはずしていく。

口に含んだガリガリくんはひんやりしていておいしかった。

ぽたり

雫一滴。・・・涙。

私がこれを理解するのに数秒かった。

「寂しいなら、我慢しないでいいんだよ・・・蘭」

ぽんぽんと親友は私の肩を軽く叩いた。

その間に私の目尻には抱えきれないほどの涙が溜まっていく。もう一度彼女は私の背中を撫ぜた。

それを合図に私の目から涙が溢れ出た。

自分では止められないほどの水が顔を伝っていく。

「泣きたいなら思う存分泣けばいい」

彼を、信じているなら。

『ぜってえ帰ってくっから』

・・・心の声を素直に。

7・幼馴染（後書き）

こんにちわ！

お久しぶりですww

最近パソコンを触っていなかった・・・とまでは行きませんが、あ
らすじが思いつかなかったのでここまで来てしまいました。

蘭からの視点。どうだったでしょうか。

・・・まあ今のところこころ辺の話はこれからの展開にそこまで深
く関わらないと思います。

軽く見ていただいて結構です。（・・・多分）

これからも宜しくお願いしますv

8 ・ 正体（前書き）

この連載を読んで下さっていた皆様、
長らくお待ちたせ致しました。
すみませんでした。

8・正体

「・・・で？」

「は？」

沈むように目を伏せてから約十分後。

彼女は鋭く光る眼光を俺に向け、何かを探ろうとしていた。

俺はそんな彼女の醸し出す雰囲気圧倒され、ただ静かに瞬きを繰り返した。

—— な、なんだ・・・？

『俺、知らねえ内になんかしたのか？』

そう思い、頭の中にある様々な記憶を浮上させてみるが・・・そんな記憶は一つも、ない。

首を捻ってみても、ないもんはどうしようもないのだ。

「な、なんだよ？」

あ、やべえ・・・。

これじゃあ俺がこいつに怯えてるみてえじゃねえか。

言い直そうと口を開くが、一度言ってしまったものは仕方がない、

と閉口する。

静かに彼女の返事を待った。
だが、五分経つても何の返事もない。

「おい・・・？」

しばし心配になり、声をかけてみる。
それに返ってきた返事は・・・深い、深い溜め息。

ムツと来た。

なんだよ、心配して損した。

はああああ・・・と、俺は仕返しとばかりにもっと深い溜め息を吐いて見せた。

その様子に、彼女はやっぱりイラッとしたみたいだ。

俺は彼女にばれないように小さく笑う。

さっきのこともあるって、目の前で笑うわけにはいかない、と俺なりの考えがあったから。

「・・・んで、なんだよ？さっきのは」

これまでの雰囲気振り払い、俺は緊迫した気配を纏った。

とりあえず、ジト目で睨んでみせる。
その様子に彼女は小さく肩を竦めた後、隣にいる『彼』をじっと見つめて俺に言った。

「彼、誰よ？」

思わず「今更っ！？」と叫びだしたくなるのをなんとか抑え、そーいやこいつは知らねえんだっとな、と納得して隣に立っている黒羽を見た。
当の本人は状況を分かっているのか分かっていないのか、妙に楽しそうな顔でこちらを見ている。

——・・・なんなんだ？こいつは

ますます意味不明な男である。

まあさつき対面したのが初めてなのに対してやけにこっちの情報を持っているとは思っていたのは確かだが。
こいつはかの有名な《怪盗キッド》だからとその疑問を後回しにしていたのだ。

「おめーもよく知っているヤツだぜ」

そう言って俺は、シニカルな笑みを彼女に向け、言い放った。

8 ・ 正体（後書き）

お久しぶりです。

三森皐月です。

この連載は絶対に完結させようと思っていますので、これからもよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0363e/>

スレチガイ

2010年10月9日22時19分発行